

小児看護

THE JAPANESE JOURNAL OF CHILD NURSING, MONTHLY

8

Vol.46 No.8 AUGUST

2023

川崎病の子どもと 家族への看護ケア



連載

もっと知ろう！障害がある
子どもと家族のくらしの支え方
臨床現場における現任教育

へるす出版

佐藤聡美 Sato Satomi

聖路加国際大学公衆衛生大学院准教授

第26回 いかなる理由があろうとも

子どもがある日、友だちの傘を間違えて差して帰ってきた。子どもはそれに気づくと、ワンワンと泣いた。「明日、『傘を間違えてごめんね』と伝えればいい」と伝えても、「そのセリフが言えない」と言って、さらに号泣した。本人の言い分は、わざとではないのに、謝らなければならないことに納得できない、とのことだった。翌朝、先生の仲介で無事に謝れたらしい。

半年後。子どもがクラスメイト二人に頭をポカッとされたらしい。そのとき、担任からの伝言で、二人の親からお詫びがあったが、ひとりの親から「自分の子どもは、もうひとりの子に命令されてやった」と伝えられた。だが、私にはわだかまりしか残らなかった。そう聞かされたところで、子どもが叩かれた怒りは収まらなかったからである。

1年後。子どもがちびっこ電車に乗って遊んでいるとき、隣の電車と接触して相手の電車の部品が外れた。その電車を触っていた大人は、「いいよ、いいよ」と言ったので、子どもはそのまま前進してしまった。そこに、部品が外れた電車の持ち主が現れて、「なんですぐに来てくれなかったんだ。大事な電車なんだぞ」と怒った。大人は子どもを指さして「あの子が…」と言い出した。子どもが呼び出されて、事情聴取さながらになった。

遠目に見ていた私はしばし躊躇したが、子どもに悪気がないからこそ、「接触したのはうちの子ですけど、あの方が『いいよ』と言ったので進んでしまいました」と擁護してしまった。それが火に油を注いだ。その瞬間、「命令されてやった」と言った親と自分が重なった。と同時に、それではいけないことも悟った。

私も彼女も子どもを庇いたくなる気持ちを抑えて、「いかなる理由があろうとも、あなたの気持ちを傷つけたことに変わりはないのだから、大変申し訳ない」と言うべきだったのだ。いかに自分が加害者になるつもりではなかったかを、被害を受けた人に説いてはいけないのだ。

がんの治療を経験した方でも少し似たようなトラブルがある。頑張っているけど仕事があまくできずに、上司に注意される。すると、「小児がんの治療を受けて晚期合併症があつて…」と話し始める。当然、より炎上する。病気を言い訳に使うと信用してもらえなくなるのである。まずは、かけている迷惑を謝り、対策を聞くしかないのだ。病気でできないことがあるのなら、最初に申し出ておかないといけない。

カーネギーの『人を動かす』という本の冒頭が「謝る」で始まっている。その意味がようやくわかった。八月の苦瓜よりも苦い教訓である。

佐藤聡美
さとう・さとみ

聖路加国際大学公衆衛生大学院准教授。博士。臨床心理士、公認心理師。NPO法人エゴノクラブ理事長。富山県出身。米国のBellevue Community Collegeを卒業後、お茶の水女子大学大学院修了。国立成育医療研究センターにおいて小児がんの臨床と研究に携わる。お茶の水女子大学特任講師を経て、現職。著書『看護師と家族でかなえる最高のサポート：子どもの入院から就学・就労まで』。工作好きな一児の母。令和4年度大谷賞(日本小児血液・がん学会賞)受賞。